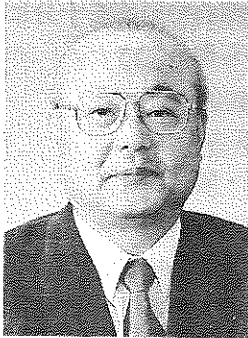


栃木県中学校長会報

〔役員所感〕

平成14年2月14日 発行 第96号
栃木県中学校長会広報部

新しい教育の時代を迎えて



栃木県中学校長会副会長
鹿沼市立東中学校
校長 角田 昭夫

あと3ヶ月が過ぎると、学校週5日制が始まることになる。学校の地域社会への開放とか、地域と学校との連携とか、学校は地域の中にあるのだから、生涯学習の視点から見ると、学校は生涯学習施設の一つであるとか、色々なことが言われている。

学校週5日制実施の趣旨は、確か、児童生徒を家庭に返し、本来あるべき家庭の教育力の回復を目指すと共に、児童生徒を学校・家庭・地域社会の中でバランスよく育てるために実施されたものであった。しかし、児童生徒が活動できる施設の開放、児童生徒の父母の土・日曜日の確保など、全体的に見て追いついていない状況にある。

私の学校は、今校舎改築中である。約半分位の建物ができ、一部使用開始とあって、12月10日に臨時のプレハブ校舎から新築の校舎に引っ越しをした。

廊下の腰板や床は木できており、木のぬくもりや香りが感じられて気持ちが良い。また、5階建の棟はエレベーター付きで、バリアフリーで段差はどこにもない。正に、この5階棟が生涯学習を視野に入れたこれからの生涯学習施設として機能を果たすものであろう。

1階は、広い会議室、リラクセスできるロビー、湯沸かし室などがあり、2階から5階は特別教室となっている。一般の方が料理を作ったり、絵を描いたり、音楽を奏でたりするには絶好の施設であり、敢えて特別教室を集中して建てたものである。

防火シャッターを降ろすと、出入口も別となり、昼と夜の二重の顔が存在し、これからの学校週5日制の幕開けにふさわしい校舎に様変わりすることになる。

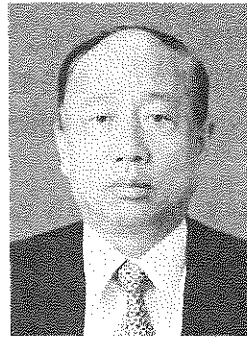
持論であるが、学校はもとより地域に存しているものであり、学校はその地域の風土色や香りを受け、独特の文化を持っている。それ故、それを生かすことがその学校の特色を生かすことと思っている。

その地域の方々が、生徒と一緒に同じ校舎を使って学んでいくことになれば、時には授業などを自由に参観するなどの交流をして、その文化や香り、あるいは地域の人々の行動様式までを落としていき、学校や生徒への影響を与えていくものと思う。

先日、集会で生徒達に「50年間位使うかもしれない強固な建物であり、君達はその幕開けに使用する生徒である。大切に美しく使いたいですね。」と話した。清掃も意欲的にするし、窓の開閉も丁寧になってきた感じで学校の雰囲気が変わってきている。

やっぱり新しいということはおもしろいことなのだろう。生徒の心にも、顔にも笑みがこぼれてさわやかな毎日である。これからの時代にふさわしい校舎でふさわしい生徒を育てることが私の使命であることを実感している。

緑を愛し、心豊かな生徒の育成を目指して



栃木県中学校長会副会長
馬頭町立馬頭東中学校
校長 清水 賢治

今日も子どもたちの元気な掛け声が学校林の山々にこだましています。青々としていた木々も今ではすっかり葉を落とし、やがて訪れる厳しい冬に備えています。

完全学校週5日制のもと、「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し「生きる力」を育成することを柱とした新教育課程の完全実施が目前に迫りました。新教育課程では、個に応じた指導の充実、体験的・問題解決的な学習活動の重視、総合的な学習の時間の創設等々、教育課程が大きく改善されました。さらに、開かれた学校づくりや実施したことに対する説明責任など、各学校の自主性・自律性、校長の指導性などが強く求められています。また、10月に青森県で開催された全日本中学校長会研究協議会の第四分科会では、総合的な学習の時間のカリキュラム開発の視点として、地域自然や人材の活用、体験活動を通して学ぶ楽しさを味わわせること等々が提案されました。

本校は、校舎近くに大きな学校林を保有し、昭和56年の開校以来、全校生で緑の少年団を組織し、学校はもとより、地域を挙げて学校林活動や学校環境緑化活動に取り組んできております。学校林に登って辺りを見渡すと遥かに八溝山から続く山並が学校林まで連なり、豊かな自然が目に入ってきます。子どもたちの汗がしみ込んだ花壇には四季折々の花々が咲き乱れ、小鳥の鳴声も聞こえてきます。大臣賞受賞記念碑に刻まれている「山は友だち」は全校生でアイディアを出し合い決めたものです。10月には学校林活動の一貫として、学区内の小学6年生を招いてグリーンミーティングを実施しました。

本校が開校以来、脈々として受け継がれてきているこれらの活動を「心の教育」や「生きる力」の育成の実践的な場としてしっかりと捉え、更に改善・充実を図りながら、より発展させていきたいと考えております。

第52回全日本中学校長会研究協議会 青森大会に参加して

事務局長
宇都宮市立旭中学校
校長 小林 幸 正

第52回全日本中学校長会研究協議会青森大会は、平成13年10月11日(木)、12日(金)、青森市文化会館を主会場として、全国から2000余名(本県37名)が出席して開催された。

大会では、昨年度新設された研究主題『「生きる力」をはぐくみ、新しい時代を拓く心を育てる中学校教育』を掲げ、全体会、分科会で活発な協議が展開された。

開会式のあいさつで星正雄会長は、新教育課程全面実施を日本教育の出直しの機会であると捉え、日本人としてのアイデンティティー再興のため、校長自らが情報発信源になろうと呼びかけた。

笹武志大会実行委員長も、新教育課程全面実施は、地域の文化やモラルの向上も視野に入れた取り組みであることを強調した。

文部科学省説明では、芦立訓教育課程企画室長が、教育改革国民会議において、子どもたちの社会参加意識や学力をどのように高めていくか、地域の意向を反映した学校づくりをどう進めるかについて審議されたことを紹介。さらに、その具体策として、①教育内容の厳選、②個に応じた指導の充実、③体験的・問題解決的な学習の重視等についても説明した。

全体会協議では、「新しい時代を拓く力を育てる学校づくり」と題して全日中小野具彦総務部長から、教師の意識を変える、生徒の学ぶ意欲を高める、保護者・地域とともにつくるという3視点からの提案があり、兵庫県小巻健一校長からは「“トライやる・ウィーク”の目指すもの」と題して、阪神淡路大震災や須磨事件を機に発足した本事業の取り組みの成果と課題について報告があった。

分科会協議は8会場に分かれ、第3分科会「新学習指導要領における指導と評価」では、角田昭夫鹿沼市立東中学校長が提案し、揺るぎない実践研究に会場から賞賛の声があがった。

全体会では大会宣言決議の後、「縄文文化の扉を開く」と題して、青森県三内丸山遺跡対策室岡田康弘氏による記念講演があり、青森大会は終了した。

平成13年度 各専門部活動報告

- ◆ 総務部
 - 部長 柿崎 龍夫(宇・陽北中)
 - 今年度の各種要望書、次年度の運営方針、活動の重点等の策定に当たって、総務部会で原案を十分に練り、事務局と連携を図りながら進めてきた。
 - 1 第1回部会(4月24日)
 - 役員選出、事業計画等の協議
 - 部長 柿崎 龍夫(宇・陽北中)
 - 副部長 大柿 克治(栃・栃木西中)
 - 神長 利光(河・上河内中)
 - 2 県職員福利厚生事業推進協議会作成の「教職員福利厚生事業充実に関する要望書」への意見集約(6月・7月)
 - 3 義務教育振興協議会要望書起草委員会への意見集約(6月・7月・9月)
 - 4 第2回部会(7月12日)
 - 平成13年度県中学校長会の要望書案の策定
 - 要望書の項立てと要望内容の検討
 - 5 第3回部会(9月21日)
 - 平成14年度の運営方針・活動の重点等の案の検討
 - 6 県教育委員会義務教育課との懇談会(9月27日)
 - 小学校長会と中学校長会が合同で、各理事が要望内容について説明し、それに対して義務教育課が対応
 - 7 知事部局、県議会関係者等への要望活動(9月)
 - 8 各地区での要望活動(9月)
 - 9 第4回部会(1月)
 - 平成14年度の運営方針・活動の重点等の案策定
 - 10 理事・協議員会にて運営方針・活動の重点の決定(2月)

- ◆ 事業部
 - 部長 後藤 明(宇・雀宮中)
 - 1 第1回研修会 4月24日 教育会館
 - (1) 平成13年度役員・活動内容の決定
 - 部長 後藤 明(宇・雀宮中)
 - 副部長 齋藤 雄介(河・河内中)
 - “ 齋藤 宏壽(那・東陽中)
 - (2) 活動内容の検討
 - ・校長研修会の開催
 - 2 校長研修会

- 「退職後の生活設計について」の研修会の開催
 - (1) 日時 12月13日(休)13:00～
 - (2) 場所 栃木県教育会館 3階大会議室
 - (3) 内容
 - ア あいさつ
 - 栃木県中学校長会長 須藤 光弘
 - 栃木県教育委員会福利課長 早瀬 誠一 様
 - イ 講話
 - (ア) 医療保険について
 - 栃木県教育委員会福利課共済給付担当 副主幹 葎田 昌 様
 - (イ) 退職手当について
 - 栃木県教育委員会福利課福利厚生担当 副主幹 大野美知子 様
 - (ウ) 年金制度について
 - 栃木県教育委員会福利課共済給付担当 事務次長 鬼頭 行尚 様
 - (エ) 教育福祉振興退職者部会について
 - 栃木県教育委員会福利課退職者部会担当 班長 吉田 勇 様
 - ウ 質疑応答
 - (4) 参加者 栃木県中学校長会会員 61名
高等学校職員 2名 計63名

- ◆ 調査部
 - 部長 定岡 明義(宇・陽西中)
 - 調査部は、全日本中学校長会教育情報部の依頼による、平成13年度「中学校教育に関する調査」を実施し報告しました。
 - ここでは、その一部を関東甲信越地区について下表にまとめ掲載します。
 - なお、本県の調査にあたっては、県教委義務教育課に協力いただいたことを申し添えておきます。

項目	栃木	東京	神奈川	千葉	埼玉	茨城	群馬	山梨	長野	新潟	備考	
校長の定年前勤奨	50	45	45	54	45	45	50	45	58	50	何歳から	
校長の再雇用期間	2	5	2	2	3	-	-	5	-	-	最長年	
中学教諭月額	初任	20	20	20	20	20	20	20	20	20		
	10年	32	32	32	32	33	33	33	32	33	単位・万円	
	20年	42	41	42	42	42	42	43	40	42	40	
中学教員1人の旅費	92	56	61	55	62	72	89	90	77	75	単位・千円	
教諭の同一校勤務	一般	10	8	10	7	10	6	8	6	10	11	上限年
	新採	4	4	10	5	5	6	5	2	-	3	

- ◆ 研修部
 - 部長 谷島 利康(宇・一条中)
 - 1 第1回研修会(4月24日) 教育会館
 - (1) 平成13年度役員・組織
 - 部長 谷島 利康(宇・一条中)
 - 副部長 高橋 仁市(南・烏山中)
 - “ 酒井 一行(小・小山第二中)
 - (2) 研修活動計画の設定
 - ・研究主題「生きる力」を育み、新しい時代を拓く心を育てる中学校教育
 - ・研究の視点
 - 生徒に豊かな人間性の基礎・基本を身に付け、主体性や個性を生かす特色ある教育活動を展開し、自ら考える「生きる力」を育む中学校教育の創造
 - 2 第2回研修会(6月26日) 教育会館
 - (1) 組織作り及び事業計画概要について
 - (2) 研究大会運営計画について
 - 3 第3回研修会(7月31日) 教育会館
 - (1) 研究大会の運営と役割分担について
 - (2) 研究収録の執筆要項について
 - 4 第23回栃木県中学校長会研究大会(9月7日) 栃木県子ども総合科学館
 - (1) 開会行事
 - (2) 全体会・全日本中学校長会青森大会 関東甲信越地区代表提案
 - (3) 講演「思春期の心性とその対応」 見川精神衛生研究所長 見川 泰岳 先生
 - 5 第4回研修会(10月9日) 教育会館
 - (1) 研究大会の反省
 - (2) 研究収録の編集
 - 6 第5回研修会(12月6日) 教育会館
 - (1) 研究収録の校正
 - (2) 次年度活動計画の策定

- ◆ 広報部
 - 部長 橋本 忠良(河・河内中)
 - 平成13年度栃木県中学校長会の会報発行にあたっての広報部の構想、部会の開催、会報の内容等は、次のとおりであった。
 - 1. 平成13年度・会報の構想
 - (1) 会報は年2回発行する。(95号、96号) 内容は、ほぼ従来どおりとする。
 - (2) 専門部については、前期号(95号)に活動計画を、後期号(96号)に活動報告を掲載する。

- (3) 95号、96号ともに8ページ編集を原則とする。
- (4) 最後のページに「編集後記」を載せる。部長が執筆するものとする。
- (5) 読みやすい会報を目指して、体裁を今年度からA4版とする。

2. 部会の開催

- 第1回 平成13年4月24日(火)
県教育会館。本年度役員決定、編集方針等について協議した。
- 第2回 平成13年7月10日(火)
南河内中学校。会報95号、96号の内容、執筆者の選定、原稿依頼、今後の課題等について協議した。

3. 会報の発行と主な内容

- ・第95号 平成13年9月7日発行
内容 会長あいさつ、役員所感、退任に当たって、各専門部の活動計画、新任校長の一言、私の朝会訓話等
- ・第96号 平成14年2月10日発行予定
内容 役員所感、全日中(青森大会)の報告、研究学校報告、各専門部の活動報告、海外教育事情等

4. その他

予算の都合でこれまでの12ページから8ページの会報となった。また、今年度の「海外研修視察記」については、県教委からの派遣者がなく、小山三中学校の中野晴永先生に「中国への中学生派遣事業から」と題して、執筆していただいた。

◆ 進路対策部

部長 大出尚美(小・大谷中)
平成13年度の研究主題を「中学校進路指導の適正な推進と高校教育への提言」と定め、3回の研修会を開催した。概要は次の通りである。

- ◇ 第1回研修会 7月10日(火)
 - ① 昨年度までの研修のまとめと今年度の事業計画について
 - ② 公・私立高等学校の入学選抜制度について
 - ③ 私立中・高等学校連合会代表との協議内容について
 - ・次回10月に予定している懇談会についての運営方法等の細部について話し合った。
- ◇ 第2回研修会 10月23日(火)
 「私立中・高等学校連合会代表との懇談会」
 - ① 私立高等学校の教育について

- ② 入学選抜について
上記について建設的な回答を得ることができた。特に年々早まっている入学試験日については、県立の推薦入試の時期が2月の中旬以降に変更されれば、私立高校の一般入試の開始時期を1月にできるので長年の要望が実現できる。その他、各地区毎に印刷して配布します。

- ◇ 第3回研修会 12月6日(木)
 - ① 前回の懇談会のまとめ
 - ② 各地区の実情報告
 - ・中高連絡協議会について
 - ③ 公立高等学校への要望(高校の入試改革)
各地区からの要望されている高校入試について協議した。次のようなことをまとめた。
 - ・普通科についての推薦の改善、合格内定通知を文書で等意見が出された。
 - ・その他の課題も次年度に引き継ぎたい。

◆ 生徒指導部
部長 関口周治(那・黒田原中)

- 1. 研究概要
〔研究課題〕
いじめ問題及び不登校等不適応生徒への適切な指導と対応
 - (1) 第1回研修会 13. 4. 2. (火) 組織作り
 - (2) 第1回研修会 13. 10. 23. (火) 実践例研修
- 2. 第2回研修会の紹介の紹介
研修課題について、各校の研究実践例を発表し合い、併せて情報交換を行いながら課題解決に役立てることにした。
〔実践例〕
 - (1) 校内指導体制
 - ・生徒指導全体計画の共通理解
 - ・教職員の意識改革と研修の充実
 - いじめ早期発見チェックリスト(教師用)
 - ・問題行動対策委員会(いじめ・不登校)
 - ・生命尊重並びに人権教育の徹底
 - 全校朝会、道徳、作文等を通して
 - ・生徒指導主事による情報の集中管理
 - ・定期教育相談の実施
 - ・家庭訪問の徹底
 - ・生活ノートを通じた筆談による指導
 - (2) 各種連携
 - ・中・高校の連携
 - 生徒指導部が中・高校を相互訪問

研究学校の発表概要

南河内町立南河内中学校長
橋本忠良

豊かな感性や情操を
はぐくむ学校づくり
—朝の10分間読書や生徒会活動を
中心にした読書活動を通して—

- 1. はじめに
本校は、平成11年度～13年度の3年間、県教育委員会及び町教育委員会からの指定を受け、標記の研究主題に基づき、研究に取り組んできた。県教育委員会から示された研究の趣旨は次のようなものである。
「読書に親しんだり、美術、音楽等の芸術にふれたりすることは、豊かな感性や思いやりの心をはぐくむ上で大切なことである。特に、考える力等の知力低下の背景の一つに、読書離れ、活字離れが進み、それが児童生徒の心の在り様にも影響しているとの指摘があり、読書活動を活発にし、子どもの時からその習慣を身につけさせていくことが大切である。」
以上の趣旨に則り、3年間、全職員、全生徒で取り組んできたものである。なお、県教育委員会の御配慮により紙上发表となっているが、もし、研究紀要が入り用の場合には、遠慮なく御連絡ください。
- 2. 研究の概要
 - 1) 研究の基本方針
 - ① 本校の学校教育の一環としての読書教育活動とし、日常の教育課程上に明確に位置付ける。
 - ② 生徒が主体的に読書に親しめるような環境づくりと積極的な生徒会活動を支援する。
 - ③ 豊かな感性や情操を培っていく基盤となる学級経営の充実と望ましい人間関係の育成を図る。
 - ④ 地域の特性を生かし、家庭や地域との連携を図りながら推進する。
 - 2) 取り組みの実践
 - ① 「朝の10分間読書」
 - ア. 基本的な考え
林公先生(市川学園教諭)の提唱する朝の10分間読書の考えにほぼ則して実践している。四つの原則(みんなで、毎日、読みたい本を、読むだけ)をほぼ守る。

- ・適応指導教室との連携
- ・スクールカウンセラー、心の教室相談員、学校支援員との連携
- ・各種専門機関との連携
総合教育センター、自治医科大学、児童相談員等

◆ 修学旅行部

部長 真壁敏夫(宇・姿川中)
平成13年5月7日(月)県教育会館において、専門部会を開催し、本年度の組織及び事業計画を次のように決定した。なお、本部会は従来から関東地区公立中学校修学旅行委員会及び全国修学旅行委員会とのかわりがあり、それらの研究団体との連携を図りながら活動してきた。

- 1. 組織
部長 真壁敏夫(宇・姿川中)
副部長 中沼利栄(上・加蘇中)
田中耕一(下・小山城南)
次長 藤田秀夫(宇・宝木中)
地区運営委員
- 2. 本年度の事業概要
 - (1) 6月1日～2日 関修委総会並びに第1回研究協議会 (群馬・伊香保町)
 - (2) 県修学旅行専門委員会修学旅行部事業概要の説明会 (県教育会館)
 - (3) 7月13日 関東・近畿・東海三地区公立中学校修学旅行連合委員会 (大阪市)
 - (4) 7月30日 関修委事務局へ「平成15年度修学旅行列車申し込み集計表」提出
 - (5) 9月21日 第2回研究協議会 (東京)
輸送計画の調整
 - (6) 10月10日 輸送計画他県との調整(水戸市)
 - (7) 10月19日 第3回研究協議会 (東京)
輸送計画決定
 - (8) 11月22日 第18回全国修学旅行研究大会
栃木県校長43名参加 (千葉・柏市)
 - (9) 11月30日 「平成15年度修学旅行新幹線輸送計画書」を配布
 - (10) 平成14年2月1日 役員代表者会議
年間行事活動報告と新年度対策 (東京)
 - (11) 2月15日 第5回研究協議会 (東京)
新年度対策
平成12年度修学旅行実施報告書のまとめ
国庫補助金増額の陳情。体験学習の案内作成

イ、具体的に日課表に位置付けたこと
毎朝、教職員は8時に打ち合わせを行い、8時15分から全校一斉に朝の10分間読書に入る。担任も一緒に読書する。

(職員室でも担任以外の教職員が読書)

②「ブック・トーク」

◎ 生徒や教職員による「ブック・トーク」を学年集会や放送を通して行っている。

③「南河中の推薦図書50冊」の選定と改訂

◎ 生徒会図書委員会が生徒や先生、保護者の声をまとめ、推薦図書50冊を選定し、書く学級に備えてある学級文庫に入れている。

④「親子読書」の勧め

◎ 保護者会やPTA総会などで読書の意義について話したり、夏休みや冬休みなどの前に保護者をお願いしたりして、可能な限りでの「親子読書」を勧めている。

⑤「地域との連携」

◎ PTA文化部の保護者が、近くにある町立図書館に行き、集団貸し出し制度を利用して、保護者が中学生に勧めたい本を借りてくる。

これを、各学級の学級文庫に配架し、生徒の利用に役立てている。

3. 研究の成果と今後の課題

① 研究の成果

- ・ほとんどの生徒が「読書が楽しい」と答えている。読書の習慣が身につくようになった。
- ・学校生活の中で友人に対する「思いやり」や「気づき」の心が育ちつつある。
- ・ふだんの学校生活の中で、自分が読んだ本の貸し借りをしたり、本に関する話題が増えたりしている。望ましい人間関係が育ちつつある。
- ・物事に集中して取り組む姿が見られる。
- ・教師自身が読書の時間がもてたことを喜んでいる。本に関する話題も増えた。

② 今後の話題

- ・全生徒が文字通り「読書」に没頭できるよう、環境整備を一層進めていくこと。
- ・家庭での親子読書の一層の推進。

4. おわりに

3年間の実践研究を通して、ほとんどの生徒に読書の習慣が身につくようになった。読書によって想像力や集中力、語彙力などが養われつつあることを実感している。この実践研究を今後とも継続していき、「豊かな感性や情操を身につけた生徒」の育成に一層努めてまいりたい。

研究学校の発表概要

小山市立小山城南中学校長

田中 耕一

豊かな未来づくりへの
クリエイティブな体育の実践
～体育科における個性と完成と
重視した課題解決学習～

1. はじめに

本校での2ヶ年にわたる研究は、体育の授業づくりに中心を置きながらも、生涯スポーツを見据え、生きる力の基礎づくりを目指したものである。様々な取組に共通するものは、将来役に立つ「心づくり」である。

元氣よくあいさつができる子、昼休みに友だちと楽しく外で遊ぶ子が増えることを願いながら日々の授業実践に生徒の個性や感性が反映させられるよう取り組んだ研究でした。

2. 研究の概要

1) 研究主題

豊かな未来づくりへのクリエイティブな体育の実践

～体育科における個性と感性を重視した課題解決学習～

2) 研究主題設定の理由

- ①日常生活の身体活動の機会の減少
- ②運動の二極化減少
- ③体力・運動能力の低下
- ④生活習慣の乱れやストレス、不安感の増加
- ⑤学校における体育・スポーツ活動の重要性
- ⑥学校教育目標

以上の観点から研究主題を設定した。

3) 研究組織と研究構想

「城南にほとばしる汗輝いて」の共通スローガンのもと、5部会を設けて取り組んだ。

①実践部 心づくり

“はじける笑顔”を合言葉に、楽しいな…と感じる学校生活の推進に力を入れた。

②教科体育部 体づくり

“ひらめく発想”を合言葉とし、こんなふうになれば…というアイデアの生きるクリエイティブな体育授業の展開を工夫した。

③授業研究部

“深まる興味”を合言葉に、なんでだろう…あっ！なるほど!!という発見のある課題解決

学習に力を入れ、グループ学習による個と集団の関わりを目指した。

④啓発部 未来づくり

“変化を目指し”を合言葉に、あんなふうになりたいな…と思える未来へ向けての健康意識の高揚を図った。

⑤部活動経営部 仲間づくり

“ほとばしる汗”を合言葉に、よし、やるぞ！という気概を持たせ、部活動を経営的にとらえて取り組んだ。

3. 研究実践内容

各部会での具体的な実践内容は以下のとおり。

①実践部

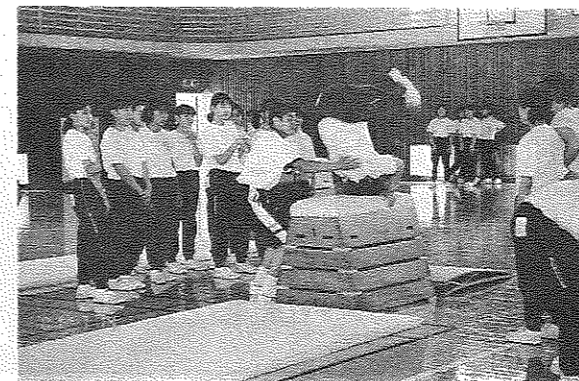
- ・もっと遊んだy・礼節の重視
- ・さわやか川柳の掲示・遊びの紹介
- ・学年レクリエーション・朝のあいさつ運動

②教科体育部

- ・3クラス合同授業・年間計画の工夫改善
- ・選択制の拡大・グループ学習の充実
- ・学習カードの工夫・フィードバックカード

③授業研究部

- ・チャイム起立の徹底・要請訪問の実施
- ・武道の精神の日常化・課題解決学習の展開
- ・総合的な学習の時間の充実



授業風景

④啓発部

- ・すこやか城南の発行・アクションプラン
- ・意識調査の実施・講演会の開催
- ・意識を高める掲示活動・健康教育活動

⑤部活動経営部

- ・部活動だよりの発行・クリーンデイの実施
- ・ブレイクタイムの実施・実態調査の実施
- ・部活動開きを目指して

4. おわりに

大きな研究成果があった。昼休みになると広い校庭が所狭しとなつて生徒の歓声が響き渡る。失いかけていた時間、空間、そして仲間を取り戻し、活力に満ちた学校生活が展開されている。

〔海外の教育〕

中国への中学生派遣事業から

小山市立小山第三中学校長

中野 晴永

小山市では、友好都市である中国遼寧省本溪市への中学生派遣事業が今回初めて実現しました。

今回の事業の目的は、「本市の中学生を友好都市である中国本溪市に派遣し、派遣先の中学校等との交流を通し、国際感覚を磨く機会を与えるとともに、本市と本溪市との友好交流の進展を図る」とあり、市長を団長に市内11の中学校から一人ずつの代表生徒が、十月に五日間派遣されました。

私も学校側を代表して同行させていただきましたので、中国の教育について、また中学生の海外派遣についての成果など感じたことを、いくつかまとめてみました。

一つ目は、中学生という若い世代の交流の意義は大きかったということです。

今回直接交流を図ったのは、本溪市教育委員会直轄の「実験中学校」というエリート校で、生徒数は3741人、57クラス、教員数162名の超大規模校でした。

学校をあげての「熱烈歓迎」ぶりはいかにも中国的な印象でした。歓迎セレモニーでは生徒代表(女生徒)の歓迎のあいさつがありましたが、その表情豊かではきはきした物言いは、言葉を越えて十分その意が伝わってくるような堂々たるもので、しっかりしたその態度にまず圧倒されました。その後合唱、横笛独奏、独唱、琴(箏)の演奏、ダンスと、次々に歓迎アトラクションがありました。いずれもその技量はすばらしく、演奏態度はみな表情豊かできびきびしており、日ごろの「表現力」の訓練ぶりが推察されましたが、何よりも、若者のひたむきさ、学ぶ喜びを感じている様子が強く伝わってきました。

今中国は、その発展ぶり変貌ぶりはめざましく、中学生の姿にも、夢と希望に満ち何事にも真剣に取り組む姿勢が感じられましたが、ちょうど高度成長期前の日本の状況を思い起こし、今の日本の教育で忘れられている大切なことを思い出したような気がします。

小山市代表の生徒達も大いに刺激を受けた様子で、短期間での事前学習を生かし、中国語で自己紹介の後、小山市の学校紹介、「小山わが町」「四季の歌」(中国語で)の披露、さらに、「小山音頭」を踊り、伝統文化の「折り紙」を教えるという盛り沢山なメニューを堂々とやり遂げました。特に「小山音頭」は、途中から現地中学生も全員踊りの輪に入り、見様見真似で楽しく踊るといふ和気藹々たるものでしたし、「折り紙」も、グループ毎に手をとって教え

ながら全員「鶴」を折りあげました。

これぞ、言葉の壁を越えた若者ならではの交流と言えるものでした。その後の実験中学校生徒との昼食会でも、身振り手振りに英語を交えてかなりコミュニケーションが図れた様子でした。「英語」は、中国語が分からない生徒が咄嗟に思いついて使ってみた窮余の策でしたが、これがまた中国の生徒はべらべらの状態で、生徒たちはびっくりしたそうです。聞けば、中国では小学一年生から習っているようで、ここでも国際化、情報化に懸ける中国の並々ならぬ教育姿勢が感じられました。

生徒たちは、昼食が終わってもなかなか別れがたく、わずかな時間の中でもこれまで通じ合えるものかと、あらためて中学生年代ならではの純粋な柔軟性を感じました。

今回の派遣が、大人でなく中学生という発案は、まことに当を得たものであったと今あらためて実感しております。

二つ目は、実際の体験を通して、国際感覚を身につけられたということです。

「百聞は一見に如かず」と言う言葉がありますが、特に外国のこととなると見るもの 聞くものみな珍しく、たくさんの人と出会うことで、外国人のものの考え方、習慣などを肌で感じる事ができ、ほんの一部ではあっても中国という国の理解ができたのではないのでしょうか。

特に今回の訪中では、外交官として北京駐在の経験のある市長の計らいで、「北京日本大使館」、「日本人学校」なども公式訪問に組み入れていただきましたので、我々大人でもめったにできないような貴重な体験ができました。とりわけ日本大使館では、大使館の役割や実際の仕事について公使から直接お話をいただき、見学もさせていただきましたし、日本人学校では、遠く海外の地で勉強している同年代の生徒達と交流をし、国と国が理解し合っていく大切さや難しさも感じる事ができたと思います。

また、本溪市でも、市の人民政府要人との両市親善セレモニーを子どもたちも参観し、通訳を交えての公式会見の様子を目の当りにして、対外的な公式会議の在り方も理解できたのは、生徒たちにとっても貴重な体験であったと思います。

三つ目は、中国の文化と歴史を知るとともに自国の文化についても再認識できたことです。

今回、世界遺産である万里の長城や故宮博物院等を見学し、また伝統の食文化を味わうことができ、そのスケールの大きさ、歴史的背景、風土と生活文化の関係など身をもって感じる事ができたと同時に、日本文化のルーツや日本独自の文化も再認識するきっかけになったと思います。「小山音頭」を一緒に踊ったときには、国境を越えた共通の何かを感じ取ったのではないのでしょうか。

日本では、ややもすると自国の文化について学ぶ

機会がだんだん少なくなっているように思えます。自国の文化について堂々と語れるような子どもたちを育てることこそ国際理解教育の第一歩であると強く感じました。

中国でも、観光地では子どもたちの団体が目立ち、遠足や修学旅行も増えて来たそうで、ここにも中国の豊かになってきた姿が垣間見られた気がします。

私自身も、中国の力強い教育の様子に触れることができ、これからの教育の在り方に強い示唆を受けました。例えば、教育では、やはりしっかりした訓練の部分も基礎基本の重要な一端であること、貧しさの中にも夢や目標を持たせることがいかに大切であるかなどを再認識しましたし、日本人としての生き方の指針になるような教育のバックボーンが必要であることなど、むしろ現在の日本で忘れ去られそうになっていることの中にもこそ重要なものがあることを強く感じました。

このように、たいへんハードな日程ではありましたが、学んだことは大きく、まさに「総合学習」の五日間だったと思います。

財政難の中で次代を見据えた事業を企画いただいた市当局の大英断に敬意と感謝の意を強くし、今後もこうした事業が各地で企画されるよう切望するものであります。



本溪市歓迎会場にて訪中団一行

〔編集後記〕

2年間の移行期間が間もなく終わり、4月から新指導要領による新しい教育が完全実施されようとしています。校長会事務局長の小林校長先生の青森大会方向を熟読含味していただければと思います。また、副会長の清水校長先生の学校では、学校林を利用して、「心の教育」に取り組んでいらっしゃる様子が窺え、豊富な自然体験ができる生徒たちがうらやましく思われます。

どこの中学校も進路指導や卒業式の準備等で多忙な毎日をお送りのことと思います。年度末のまとめと新年度の準備等もありますが、健康にはお互いに御留意の上、勤務されますよう。 (橋本 記)